

7) 小児より検出された *S. pneumoniae*, *H. influenzae* の薬剤感受性に関する検討

富山 道夫 (とみやま医院)

近年小児より検出される *S. pneumoniae*, *H. influenzae* の薬剤感受性に関して, PISP, PRSP (以下 DRSP) や BLNAR など ABPC に対する感受性が低下した株の増加が指摘され, 全国的なサーベイランスも 1994 年より実施されている. 今回は 1995 年と 1999 年に当院を受診した小児より検出された *S. pneumoniae* (1995 年 30 株, 1999 年 50 株), *H. influenzae* (1995 年 61 株, 1999 年 50 株) の経口抗生物質に対する薬剤感受性検査を行い, 耐性菌の動向に関する検討を行った. DRSP は 1995 年 PISP 9 株 (30%), 1999 年 PISP 27 株, PRSP 3 株計 30 株 (60%), BLNAR は 1995 年 13 株 (21%), 1999 年 17 株 (34%), β -lactamase 産生 *H. influenzae* は 1995 年 3 株 (5%), 1999 年 1 株 (2%) 検出され, DRSP, BLNAR の増加傾向がみられた. DRSP に対する抗菌力が期待される CDTR の薬剤感受性は, 1995 年 MIC₅₀ 0.25 μ g/mL, MIC₉₀ 1 g/mL, 1999 年 MIC₅₀ 0.5 μ g/mL, MIC₉₀ 1 μ g/mL と MIC₅₀ が 1 管上昇し, 感受性株が耐性株に推移している傾向を認めた.

II. 特別講演

「小児科領域における市中感染症と化学療法
—— 最近の話題 ——」

国立病院東京医療センター小児科
岩田 敏 先生

第 7 回新潟急性腎不全治療研究会

日時 平成 12 年 10 月 26 日 (木)

18:30 より

会場 有任記念館

2 階 大会議室

I. 一般演題

1) Crow-Fukase 症候群に対してポリミキシン吸着・血漿交換療法を試みた一例

宇野 友康・伊藤 由美
風間順一郎・丸山 弘樹 (新潟大学 第二内科)
下条 文武
堅田 慎一・小林 央 (同 神経内科)
辻 省次

46 歳女性. 1999 年 6 月より顔面, 下肢に浮腫が出現し, 徐々に腹水貯留も認め, 某院内科にて腹水除去を繰り返していた. 2000 年 5 月頃より左下肢の筋力低下に気づき, 徐々に四肢筋力低下が進行したため, 6 月 20 日当院神経内科入院. ポリニューロパチー, 肝脾腫, 難治性腹水, 無月経, 甲状腺機能低下, 皮膚血管腫, 全身浮腫, 血清 M 蛋白 (IgM- λ) 陽性, 血清 VEGF (vaso-endothelial growth factor) 高値を認め, Crow-Fukase 症候群 (POEMS 症候群) と診断した. ステロイドパルス療法を開始し, 左上肢の神経症状の改善を認めたが, 全身浮腫, 腹水貯留傾向に変化認めず, MP 療法を開始したが, 効果はなお不十分であった. 2000 年 9 月 5 日, 中心静脈カテーテルからの感染より敗血症性ショックを来し, 人工呼吸器管理下においてポリミキシン吸着を行った. 施行後より血圧上昇し尿量も増加した. 抗生剤で感染症を十分コントロールし, 原疾患に対して 9 月 12 日より血症交換を開始した.

2) 当院におけるエンドトキシン吸着療法の問題点

中山 均 (白根健生病院 内科)
綿貫 憲治 (同 臨床工学科)
清水 孝王・福田 喜一 (同 外科)

当院では昨年一年間に 7 例の敗血症性ショック, 感染による SIRS, に対してエンドトキシン吸着 (PMX) を施行し, 6 例救命できた. エンドトキシン吸着後は血